

●川上 真央

新幹線は遙かな川面
ゆるやかに
耳の鍾乳洞を開いて

●互井宇宙論

ホログラムですが献血したいです

●快名

手をとってまた手をはなす／
はなされた手がまた手をとる

渚と呼んだ

●さいう

性欲をやめて
ひかげに見つめれば
ましろいサラダボウルのきみだ

●青木菓子

モンブラン崩せば口は大聖堂

人工知能の発達により人間がAIに代替されてゆくなかで、人間の最後の砦とも言える身体性は今後ますます重要なテーマになってゆくだろうと思う。最大時速300キロを越える新幹線の速度の地平を「川面」と捉え、水平を滑ってゆく身体の浮遊感から自らの三半規管に古代の時間を内包する空洞を見いだす。ヴァーチャルな空間におけるアバターはホログラムのように私という三次元の情報を立ち上がらせる。肉体のない人間が他者を救えるのか否か。時代的な問いへ繋がるはずだ。手を繋ぐ。他者の身体に触れるいにしえからの営み。波が打ち寄せる渚もまた古くからの地球の営みと言えるだろう。肉体に否応もなく宿る

性欲の生理は、ときに相手を歪めて認知してしまう力を持つ。もしも性欲を「やめる」ことができれば。清潔で無機質なあなたを見いだすことの安心と寂寥の狭間で精神は揺れ動く。美しいモンブランの造形を崩すとき、口のなかに繊細で脆く絢爛な建造物が意識される。壊れてゆく美にパイプオルガンや鐘やステンドグラスが共振しながら鳴り響いている。

●松下 誠一

春が終わり、

夏が終わり裸足のきみ

と

安全なエリアで波を聴く

●雲理そら

盲信のためにあなたは生きていて
終わるまで編み物をしています

●高田皓輔

トランプのように季節は配られて
あなたはわたしに選ばせたがる

●金光 舞

生まれてきたのは私のせい
だから三春駒の
鬘に展く花になりたい

●森川 紬

今朝は一つ結び
ねむると優しく離れてゆく
たんじょうび

偶然にこの世に生まれ、必然に時代のなかで生きること。災害やテロリズム、戦争や事件が時代の精神を少なからず形成してきた。「安全なエリア」という言

葉がもたらすものは。避難区域や最大遡上高は震災の記憶とともに口にされる言葉になった。避難マップが各家庭に配布される日常において私たちの「安全」は今後も変わり続けてゆくだろう。「盲信」の言葉のなかに宗教や信仰は含まれるだろうか。信仰のために大勢の命が奪われ続けている今、何かを誰かを信じる危うさにどう向き合うべきか。同じ編目を繰り返す作業をささやかな日々の比喩ととるべきか、無心の没頭を別の信仰と受け取るべきか。偶然の采配によって配られたはずの季節のなかで、あなたは恣意的に私の選択を動かそうとする。それは政治にはじまり恋愛にいたるまで逃れようのない事象だとわかりながら、おそれつつ相手の心を見据えてしまう。自己責任という言葉は、加害／被害の境界が曖昧になるほどに大きく響く。生まれてきたことさえも自己責任ならば。生きや、子を産み育てる願いは一体の誰に帰属するものなのだろう。生きることには死へ接近する営為だ。言い換えれば誕生日から刻一刻と遠ざかってゆくことでもある。今朝を重ねて、生まれた岸边に繋がれていた舟はいつのまにか沖へ流されてゆくのだ。

●ムクロジ

花陰にカレーは飯をまわりこむ

●大西 美優

おすしひとつ交換しよう
はだら雪

●彩燈 琴璃

真昼間に茹で大根が透けていく
また占いは少し当たって

●上原一樹

ケチャップを押し出す力沈丁花

●マズルカ

大学にまだ愛されている楔

よく見ること、観察することは詩歌の基本であり、幾度も立ち返るべき原点であると感ずる。何を思うかよりも何を見るかのほうが内面を饒舌に語り得る可能性がある。緩やかな白米の丘のめぐりを回り込むカレー。花影の光陰の色彩とゆっくり移動するところのあるルーのスローモーションとが不思議にゆたかな気分を味わわせてくれる。相手と食べものを共有するふくよかな時間の膨らみ。ふわりと酸っぱいお寿司のシャリとはだら雪の冷たい白さとが感覚の裏側で遠く繋がる。何気ない一言の持つ力が場面を立体的に立ち上げる。煮ることで柔らかく透けてゆく大根。占いに予言された自分の向こう側はどのような景色だったのだろうか。大根と未来とが淡く重ねられるユニークな詩的構造。ケチャップと沈丁花、呼応する音感が魅力的だ。押し出されるチューブ容器と「沈」の字。発想の糸を探りたくなる飛躍の楽しさは詩歌の与えてくれるよろこびの一つだろう。楔は木製のドアストップパーと解釈した。「まだ」にはすでに主体は愛想を尽かしている様子がうかがわれる。「愛」の概念の汎用性にも注目した。